

『クライム・ソドム 2』 サンプル

目次

登場人物紹介

第一話

(サンプル掲載はここまでとなります)

(以下、製品版収録)

第二話

第三話

最終話

登場人物

半藤太郎 (ばんどう たいちろう)

22歳。某体育大学剣道部主将。

剣道部の後輩が起こした事故の責任を取る形で辱められる。

平常時 8.1 センチ、勃起時 20.4 センチのチンポ。

神田 (かんだ)・宮本 (みやもと)

太郎が主将を務める剣道部の一年生たち

高級外車に自転車で追突してしまう。

忍蔵功男 (おしくら のりお)

高級外車の主。

神田たちが起こした追突事故の示談の条件として、太郎を辱める。

ジェyson、ドリュー

忍蔵功男の部下。ジェysonはスキンヘッドの黒人。ドリューは金髪碧眼の白人。

【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。

無断転載・私的利用の範囲を超えた共有など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いいたします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いします。

第一話

半藤太一郎はシャワー室でシャワーを浴びていた。

むっちりとした筋肉質な肉体はシャワーの水をびちびちと弾いている。

太一郎の肉体は男の魅力に溢れていた。

太くがっちりとした胸筋や引き締まった腹筋、屈強な上半身を支える太い脚や髪を掻き回す逞しい腕も、凛々しい顔立ちも何もかもが男の魅力に満ち満ちている。

太一郎の肉体は体毛が偏っている。

胸板や腹筋、腕や足の毛は薄かったが、腋毛やチン毛、金玉の毛やケツ毛はもっさりとした濃かった。

だらんと垂れさがった陰茎は長く、土筆の穂のように目立つ亀頭は半分ほど皮を被っている。

身体つきからチンポのサイズに至るまで、太一郎の身体は雄として高い完成度を誇っていた。

毛が生い茂る毛玉金玉も大きく、精力がパンパンに詰まっていそうな様子だ。

「半藤主将」

「なんだ？」

隣のシャワーブースから剣道部員である雪平（ゆきひら）に声をかけられ、太一郎は顔を向けた。

「俺ら、今夜アダルト動画で抜くんすけど、半藤主将もいかがっすか？」

「お、いいっすね」

雪平の言葉に逆隣のシャワーブースから剣道部員の北見（きたみ）が声を上げた。

「偶には俺らとシモの交流をしましょうよ、半藤主将。

皆で抜けば気持ちいいっすよ」

「だよな、だよな。

一回ぐらい羽目を外しても罰は当たりませんよ」

「半藤主将の好みのタイプ、興味あるなあ」

「今日は十三本見るから金玉が空っぽになっちゃうよ」

「ばっか、お前。

一本で一発抜いたら干からびるだろうが」

雪平と北見が太一郎のシャワーブースを挟んでシモの話で盛り上がっていく。

羨ましい、と太一郎は思った。

シモの話を開けっぴろげにできるメンタルが羨ましいのではない。

気軽に「抜く」ことができる雪平や北見、いや、普通の男たちが羨ましかったのだ。

家族にも打ち明けていないのだが、太一郎は大学入学前に輪姦されている。

大学の入学金を納付するために訪れた銀行で事件に巻き込まれ、銀行強盗やその命令に従った他の人質たちに辱められ、処女アナルを犯されてしまったのだ。

おぞましいことに、太一郎は処女アナルを犯されて快楽を得、トコロテンまでしてしまった。

その日以来、太一郎はオナニーができなくなった。

男として当然の快楽であるオナニーですら、あの日の屈辱と恥辱が呼び起こされ、快楽を受容することができなくなってしまったのだ。

だから、太一郎はもう四年近くオナニーをしていない。

性欲自体が失われたわけではないので、ムラムラするし、朝勃ちもする。

けれど、気持ちよくなろうとするとあの日のおぞましが蘇り、太一郎は快楽に耐えきれずにオナニーの手を止めてしまうのだ。

こんなことは誰にも話せない。

チンポでぶち犯されてトコロテンした記憶がおぞましくてオナニーができないのだ、などと話せるわけがない。

「いや、俺はいいからお前らだけで楽しめばいいさ」

だから太一郎は心の中に渦巻く情念を押し殺して雪平たちにそう告げた。

「じゃあ、俺は先に出るからな」

太一郎は腰にバスタオルを巻いて、シャワーブースから出た。

「あーああ、見たかったなあ、半藤主将のオナニー」

「誰にも見せたことのない半藤主将の禁断の生オナニー、見てえよなあ」

雪平たちの残念そうな声を背に受けながら太一郎は思った。

俺だって、オナニーできるのならしたいに決まっている。

「大変です！ 半藤主将！」

着替えて自室に戻ろうとしていた太一郎は雪平の呼びかけに読みかけの本を閉じた。

アダルト動画鑑賞会への再度の誘いかとも一瞬考えたが、雪平の切羽詰まった声はそんな雰囲気ではない。

「どうした？」

太一郎が寮の部屋から出ると、青ざめた顔をした雪平が太一郎の手を取った。

「とにかく、来てください。

神田（かんだ）と宮本（みやもと）が大変なんです！」

太一郎が返事をするより早く、雪平が太一郎の手を引っ張る。

太一郎は早足で雪平の後を追ひ、剣道部寮の玄関まで辿り着き、絶句した。

寮の玄関には剣道部員たちの人だかりができていた。

その中心に五人の男がいる。

そのうちの二人が雪平の言う神田と宮本、この剣道部に所属する大学一年生だ。

残りの三人は部外者だ。

真ん中に立つ日本人はキラキラと輝く金の装飾品を腕や首に着けた中年の男だ。

その左に控えるのは高級そうなスーツを着たスキンヘッドの黒人。

右に控えるのは同じく高級そうなスーツを着た金髪碧眼。

二人とも大柄で堂々とした体躯の持ち主で、中央に立つ日本人の用心棒に見えた。

神田と宮本は青ざめた顔をしており、中年の男に威圧されている様子が見て取れる。

「この剣道部に何か用ですか？」

嫌な予感に襲われながらも、太一郎は剣道部主将として招かれざる来訪者である三名に声をかけた。

「君は誰かな？」

中年の男が穏やかそうな口調で問いかけてきた。

「俺は半藤太一郎、この剣道部の主将です」

太一郎が名乗ると、中年の男がふむ、と頷いた。

「じゃあ、君が彼らの責任者となるのだね。

私は忍蔵功男という。

宝石の輸入業を営んでいる」

忍蔵が名刺を差し出してきたので、太一郎は両手で名刺を受け取った。

名刺には「宝石商 忍蔵功男」と書かれており、忍蔵のウェブアドレスなどが記載されていた。

「それで、この寮にはどのような御用で来訪されたのですか？」

原則として部外者の立ち入りは禁止されています」

太一郎の言葉に忍蔵が目を細めた。

その目つきに太一郎は心臓が震えた。

顔つきは全く似ていないのに、忍蔵の表情がかつて太一郎を辱めた銀行強盗の嗜虐的な笑みを思い出させたのだ。

「その説明は彼らにしてもらおう」

忍蔵が青ざめた顔をしている神田たちに目を向けた。

「どういうことだ？」

太一郎が神田たちに問いかけると、神田が震えながら口を開いた。

「申し訳ありません、半藤主将。

俺たち、交通事故を起こしてしまいました」

「申し訳ありません」

神田と宮本が深々と頭を下げた。

「俺たち、喋りながら自転車で走っていて前方への注意を怠ってしまいました」

「それで、こちらの忍蔵さんの車に追突して、車のボディを凹ませてしまいました」

神田たちの説明を聞き、太一郎は忍蔵たちに深く頭を下げた。

「部員が御迷惑をおかけして申し訳ありません！」

「「「申し訳ありませんでした！」」」

太一郎の謝罪に合わせて剣道部員たちが深々と頭を下げる。

「正直に言っていていいかな。」

謝罪の言葉では凹んだボディは戻らないのだよ」

「仰る通りです」

忍蔵の言葉に太一郎は追従した。

「それに、私の車はいわゆるクラシックカーというものでね。

日本円にして一億はする上に、適当な修理工には任せられない」

一億という言葉に剣道部員たちが騒めいた。

追突事故を起こしただけでも問題だというのに、金額の大きさに簡単には収まらないという予想がついたのだろう。

太一郎も突然の大事に頭が痛くなる。

「前途ある若者にこうした請求をするのは心苦しいが、商売柄、私の車は広告としての役割が大きい。

クラシックカーを乗り回せるほどの資金があるというアピールは、買い付けの際に有利になるからね。

では、考えてみたまえ」

忍蔵が言葉を切った。

「君は宝石をなるべく高く売りたい立場だ。

一方のディーラーが立派な車で買い付けにやってきたのに対し、もう一方は車のボディに大きな傷が残っている状態だ。

どちらも初対面ならば、車を修理する余裕がある方とない方、どちらを信用して商売を持ちかけるかな」

「……立派な車の方です」

「その通り」

太一郎の言葉に忍蔵が大きく頷いた。

「ただの車の傷ではない。

私の商売への影響は甚大だ。

というわけで、大学に正式に損害賠償を請求するつもりだった」

……だった？

忍蔵の言葉に太一郎は疑問を抱いた。

太一郎が抱いた疑問は剣道部員たちが抱いた疑問でもあるようだ。

「君たちを見てわかった。

君たちは優秀な剣道部員だ」

忍蔵の言葉は事実でもあった。

この剣道部は太一郎が主将になってから全国大会を二度制覇している。

優秀かどうかと問われれば、優秀だという返答は間違いではない。

けれど、太一郎は忍蔵の言葉に居心地の悪さを覚えた。

追突事故の被害者が加害者を誉めているという状況に違和感を覚えただけではない。

何か、嫌な予感がこみ上げてくるのだ。

「特に主将である太一郎くん。

見事に鍛え上げられたその肉体は男の美の到達点だと言えるだろう」

「……ありがとうございます」

太一郎はこみ上げる違和感に呼吸を乱しながら忍蔵の称賛に礼を述べた。

「だから、取引をしよう」

忍蔵の言葉に太一郎は、まさか、と思った。

心の中に銀行強盗たちによって辱められたときの記憶が次々に蘇ってくる。

己の身体が弄ばれ、男たちの欲望に晒され、蹴られ、快楽に嫌悪感と恐怖を抱く身体にさせられてしまったあの時のおぞましが泥のように心に堆積していく。

「太一郎くん。

君が剣道部のために献身を示すのならば、私はそれを対価に訴えを取り下げよう」

訴えを取り下げるという言葉に神田と宮本が顔色を明るくする。

剣道部員たちは忍蔵の言葉に安堵する者もいる一方で、忍蔵の言葉に不安を抱く者もいる。

太一郎は考えた。

忍蔵の要求は間違いなく、あの銀行強盗たちと同様のものだ。

太一郎を辱め、苦しめ、蹴るものだ。

だが、太一郎が忍蔵の要求を拒めばどうなる。

この剣道部には大きな傷がつく。

事故を起こした神田と宮本は停学処分となるだろうし、剣道部も出場停止処分となるかもしれない。

いや、忍蔵が請求する賠償金の額によっては剣道部の予算の縮小、あるいは閉部も考えなくてはならないだろう。

偉大な先輩たちから預かってきたこの剣道部を太一郎の代で大きな傷を残していいのだろうか。

否、それは許されるべきことではない。

だが、太一郎は男だ。

オナニーすらできない欠陥品となり下がってはいても男なのだ。

男である太一郎が男に辱められるなど、御免だ。

一度味わわされただけでも地獄だというのに、二度目だからといって慣れる訳がない。

絶対に嫌だ。

あんな思いは二度と味わいたくない。

けれど、主将としてこの剣道部を守る責任が太一郎にはある。

保身のためにこの剣道部を見捨てることは男らしい行為と言えるだろうか。

太一郎の心は剣道部への責任と保身との間で乱反射を繰り返す。

心を定めようにも、どちらも嫌だという思いによって責任の押し付け合いが起きているのだ。

「返事をしてはくれないのかな、太一郎くん」

忍蔵が太一郎に決断を促す。

「主将……」

剣道部員の誰かの呟きもまた、太一郎に決断を促す。

太一郎の決断に己の今後がかかっている神田と宮本は縋るような目をして太一郎を見つめている。

迷いに迷った末、太一郎は口を開いた。

「……何を、すればいいのですか？」

太一郎は、己を捧げる決断をした。

もしかしたら、辱めを受けずに済むのではないか、という儂い希望も抱いて、忍蔵の要求を確認することにしたのだ。

「何、簡単なことだ、物理的にはな」

忍蔵がにやりと笑う。

「ただ、私の命令に従い、恥ずかしい姿を見せてくれればいいのさ」

忍蔵の表情に太一郎は銀行強盗たちの笑みを思い出した。

やはり、忍蔵もまたあの銀行強盗たちと同じ悪魔なのだ。

男に欲情し、男を辱めることに悦びを抱く悪魔なのだ。

太一郎は逃げ出したくなった。

剣道部主将でなかったのならば、間違いなく逃げ出しただろう。

けれど、太一郎は剣道部主将なのだ。

偉大なる先輩たちからこの剣道部を預かり、次代へと繋げる義務を背負っているのだ。

そんな太一郎が、逃亡を選択することは不可能なのだ。

「分かりました」

だから、太一郎は悲鳴を上げる己の心押し殺して了承の意を伝えた。

「主将！」

忍蔵の表情に嫌な予感を抱いた剣道部員が声を荒げる。

「いいんだ。

それで忍蔵さんの気が済んで、償いとなるのなら、俺は、いいんだ」

己に言い聞かせるように太一郎は剣道部員たちに語り掛けた。

太一郎の抱いた決意の重さを感じたのか、剣道部員たちが黙り込んだ。

「流石、男の中の男である剣道部を率いる主将ですね、太一郎くん。

潔いことは美徳ですよ」

忍蔵が拍手をしたが、太一郎はおぞましさに身体が震え出さないように制御することで精いっぱいだった。

「では、手始めに全裸になって貰いましょうか、太一郎くん」

「分かりました」

忍蔵の要求におぞましさを覚えながらも、剣道部を守るために太一郎は頷くことしかできなかった。

むっちりとした筋肉質の身体を太一郎は忍蔵たちに曝け出した。

剣道部員たちにはシャワー室で見せている姿ではあったが、好色の視線を隠そうとしな

い忍蔵の前で晒すことは心細さしかなかった。

太一郎の身体はむっちりとした筋肉質で、肌の張りは若さと健康的な色気を匂わせる。

太一郎の身体は全体としては体毛が薄いのが、腋毛とチン毛、金玉の毛、ケツ毛が濃く、男性ホルモンの強さを物語っている。

「太一郎くんは全裸を見せるときの作法も知らないのかな」

忍蔵がにやにやと笑いながら太一郎に問いかけてきた。

だが、太一郎には忍蔵が何を言いたいのか分からない。

全裸を見せるのに作法が必要だなどと聞いたことがないし、考えたこともないからだ。

「その様子では分からないようだな。」

では、宝石で考えてみたまえ」

忍蔵が人差し指を立てた。

「粗削りの原石と、綺麗に磨かれた宝石。」

観賞用として求められるのはどちらだと思う？」

「綺麗に磨かれた宝石です」

「そうだ！」

忍蔵が嬉しそうに笑った。

「ならば、太一郎くんも身体についた余分なものを取り除いて、綺麗な身体にならないとね」

「シャワーなら浴びたばかりですが」

太一郎の返答に忍蔵が大袈裟に首を振った。

「違う違う。」

男の裸体を鑑賞するうえで邪魔な体毛を剃り落とせ、という意味さ。

生まれたままの姿を見せてごらん」

「な……」

太一郎は忍蔵の言葉に顔が真っ赤になった。

太一郎はチン毛を剃ったことがある。

だが、それは小学校五年生の時のことで、周囲の友人たちにもチン毛が生えてきた中学生になるまでの間のことだ。

それを、今更、チン毛を、いや、チン毛だけではない。

身体中の体毛を剃れというのか……

太一郎は恥ずかしさに震えた。

「ああ、勿論、眉毛とまつ毛は勘弁してあげよう。」

それらは顔の機能として必要だからね」

忍蔵の補足に太一郎は頷くことはできなかった。

剃毛されるのが恥ずかしかったのだ。

「太一郎くん、嫌なのかい？」

剣道部のために耐え忍ぶというのは嘘なのかい？」

だが、忍蔵が太一郎の弱点である剣道部の名誉を突いてくる。

剣道部の名誉を盾に取られている以上、太一郎には拒否権はないのだ。

「分かりました」

太一郎は頷くことしかできなかった。

「では、太一郎くんの身体を輝かせてもらおう。

心配はいらない。

ジェイソンはこうしたことに慣れているからな。

ジェイソン」

「はい、ボス」

忍蔵の言葉にジェイソンと呼ばれたスキンヘッドの黒人男性が一步前に出た。

「この宝石の原石を磨いてあげなさい」

「かしこまりました」

ジェイソンが忍蔵の言葉に頷くと鞆からバリカンと剃刀を取り出した。

「ボスの命令だ。

まずは頭を剃る。

椅子を用意しろ」

ジェイソンの言葉に剣道部員の一人が慌てて椅子を持って太一郎の横に置く。

太一郎は椅子に座った。

「床屋だと思え」

ジェイソンの言葉に太一郎はナンセンスだと思った。

床屋は体毛除去までしないし、そもそも全裸で施術を受けるものでもない。

床屋のように思えるはずがないのだ。

ブイイイイイイン……

バリカンの刃が振動する音が太一郎の耳に届く。

「動くな」

ジェイソンが太一郎の頭髪を剃り落とし始める。

バリカンが動くたび、太一郎の自尊心がそぎ落とされていく。

好きな髪形を壊されるたびに、太一郎の人間性が否定されていく。

だが、太一郎は歯を食いしばって耐えた。

これは、剣道部の名誉と歴史を守るために必要なことなのだ。

ジェイソンがバリカンを動かすたびに、太一郎の頭髪が落ちていった……

「終わったぞ」

ジェイソンの言葉に太一郎は息を吐いた。

太一郎の全身は見事に体毛を剃り落とされていた。

頭髪は僧侶のように地肌が見えている。

もっさりと濃かった腋毛やチン毛、金玉の毛にケツ毛に始まり、それらに比べれば薄く目立たないものである他の体毛も丁寧に剃刀で剃り落とされたのだ。

「ふむ、さすがジェイソンだ。

見事に太一郎くんの魅力が輝いているではないか」

忍蔵が嬉しそうな声を上げるが、周囲の男たちが当然のように備えている体毛を奪われた太一郎にとっては屈辱でしかない。

特に恥ずかしいのが頭髪とチン毛を失ったことだ。

頭髪は坊主みたいで恥ずかしいし、チン毛がないのは男の証を失ったようで心細い。

「では、愛でてやろう、太一郎くん」

忍蔵が太一郎に近づいてくる。

太一郎は直立不動の姿勢を取ったまま目を閉じた。

好色の笑みを浮かべる忍蔵の顔を見ることが恐ろしかったのだ。

「目を閉じて、私を誘っているのかな、太一郎くん」

忍蔵がおぞましい解釈を披露する。

太一郎は銀行強盗らに辱められたときの経験から、何を言っても無駄だと分かっていたので無言を貫いた。

「緊張しているのかな、かわいいね」

忍蔵の手が太一郎の頭に触れた。

「ふむ、よい手触りだ。

やはり、愛でられる男は坊主であるべきだ」

忍蔵の手が太一郎の頭髪が失われたことを確認するかのよう念入りに頭を撫でる。

本来ならば、年長者から年少者への親愛の行為であるはずの撫でるという行為が、これほどまでに内臓が震えるようなおぞましさを生み出すとは太一郎は思いもしなかった。

「ああ、震えているね。

愛でられる経験は初めてかな」

忍蔵が太一郎の両頬を両手で包んだ。

「答えなさい、愛でられるのは初めてかな」

「……初めてです」

太一郎は震えそうな身体を押さえ込みながら答えた。

忍蔵の前で必要以上に感情を見せることは忍蔵への餌にしかないのだと感じたのだ。

「では、接吻の経験もないのかな」

「せつぷん？」

意味が分からず、太一郎は忍蔵の言葉を繰り返した。

「キスのことだよ。

好きな人とキスをしたことはないのかな」

好きな人……

その言葉に太一郎の心は震えた。

ノンケである太一郎は人波に性欲もあれば、異性を恋しいと思う心もある。

だが、二十二歳になるまでの間、太一郎は恋人を作ったことはない。

恋人を作れば、いずれはセックスを迎えることになる。

その時に、オナニーすらできない太一郎がセックスなどできるだろうか、という深刻な不安が太一郎の中から女性への積極性を奪っているためだ。

けれど、そんなことを忍蔵に言えるはずがない。

剣道部員たちもいるこの場で、過去に男に黽られオナニーすらできなくなった、などとうして告白できようか。

できるはずがない。

「いいえ……」

だから太一郎は端的に否定の言葉を返すだけに留めた。

「ふむ、それは良いことを聞いた。

口を軽く開けなさい」

忍蔵が太一郎に命令をする。

訳が分からなかったが、太一郎はその命令に従い、口を軽く開けた。

忍蔵が顔を近づけてくる。

まさか、と思うより忍蔵の行動が早かった。

太一郎の唇に忍蔵の唇が重ねられる。

唇を閉ざすより早く、忍蔵の舌が太一郎の口腔へと侵入する。

男に舌を入れられている！

太一郎はおぞましさに身体を引こうとした。

だが、忍蔵の腕が太一郎の背中と後頭部を強く抱くので、太一郎は忍蔵の舌から逃げる
ことができない。

じゅぶじゅぶ……ぬとぬと……

忍蔵の舌が戸惑う太一郎の舌に絡み、唾液を流し込んでくる。

忍蔵は煙草を吸うのか、唾液がほんのりと苦かった。

太一郎は口の中に侵入してくる忍蔵の舌を押し返そうとする。

けれど、キスの経験すらない太一郎では忍蔵の舌をどうにかすることはできない。

太一郎は舌をからめとられ、頬の内側や歯並びまで忍蔵の舌に舐られてしまう。

男に舌を入れられ、唾液を注がれている現状に太一郎の若い肌が鳥肌を立てる。

誰が見ても太一郎が汚されていると判断できる状態であった。

忍蔵の匂いがする唾液がどんどん太一郎の口の中に注がれる。

太一郎の身体の中に忍蔵の唾液が染みていく。

おぞましい！

太一郎の顔は過度のストレスで真っ青になる。

それでも忍蔵はキスを止めない。

本来ならば親しい間柄での親愛のサインであるキスが、これほどまでに太一郎を蹂躪す
る悪鬼の手腕となるのは忍蔵の悪辣さゆえだろう。

キスへのおぞましさに太一郎は鼻で呼吸をするということすら思いつかない。

満足に呼吸をできない太一郎の唇が震えはじめる。

それでもなお、忍蔵の舌は太一郎の舌を舐り、唾液を注ぎ込んでいく。

腹の底から忍蔵の臭いがするようで、太一郎は呼吸する己がおぞましく思えてしまう。

忍蔵がにやりと笑い、太一郎から唇を離した。

太一郎の口と忍蔵の舌の間にねっとりとした唾液の糸が伸び、ふつりと切れる。

それに合わせて、酸素が足りなくなった太一郎は眩暈を起こして足をふらつかせる。

そんな太一郎の身体を忍蔵が抱き留めた。

「眩暈を起こすほどに、私とのキスが心地よかったのかな、太一郎くん」

忍蔵の下劣な問いかけに太一郎は返事をすることもできない。

忍蔵が太一郎を抱き上げ、太一郎の唇に人差し指を当てた。

「これから、何千回、何万回とキスをするだろうが、ファーストキスは私のものだ。

誰かとキスをするたびに、今日のことを思い出さない、太一郎くん。

私の舌の感触、私の唾液の味は永遠だ」

忍蔵の囁きは呪いの言葉であった。

こんなおぞましいファーストキスの記憶を簡単に忘れられるような頭をしていたのならば、銀行強盗たちに罅られた忌まわしい記憶を捨てることもできるはずだ。

だが、現実の太一郎は過去の悪夢に怯えることしかできない。

そんな太一郎がこのファーストキスを忘れられるだろうか。

忍蔵の舌の動きを、苦い味のする唾液が食道を通じて胃へと流れ込むおぞましさを、どうやって忘れればいいのか。

これから先、好きな人ができても、こんなおぞましいファーストキスをされては幸せなキスなどできるはずがない。

太一郎は忍蔵の呪いの言葉に唇を震わせることしかできない。

「言葉が出ないほど嬉しいのかい、太一郎くん」

忍蔵がにやりと笑うと太一郎の胸板を無造作に掴んだ。

「ああ、いい筋肉だ。

弾力と張りがあるよく鍛えられた筋肉だ」

忍蔵が太一郎の胸板を遠慮なく揉みしだく。

太一郎はボディータッチを好まない。

元々、男同士での接触を好まない方であったが、銀行強盗たちに罅られてからは嫌悪感が強まるようになったのだ。

それでも体育会であればちょっとした弾みに尻を揉まれたりする。

悪ふざけだと分かっているから、太一郎はさっと手をはね除けて「止めろよ」と言える。

だが、今はこの手を跳ね除けることができない。

はね除けてしまえば、忍蔵の機嫌を損ねてしまうからだ。

だから、太一郎の理性は必死に嫌悪感を押し殺し忍蔵の手に耐える。

けれど、心には理屈も道理も通じない。

太一郎の心は望まぬ男からの接触に擦り減り、震えることしかできない。

男からの性的な接触は太一郎の悪夢である銀行強盗の記憶を思い出させる。

ザーメンを搾り取られ、処女アナルに遠慮なくチンポを叩きこまれたおぞましさが脳裏で何度も何度も反芻される。

考えるな、と太一郎の理性は必死に心を押さえ込もうとする。

あの悪夢で頭が一杯になったら忍蔵を突き飛ばしてでも逃れようとするのはよく分かっていたからだ。

太一郎は必死に頭の中で素振りを繰り返す。

剣筋だけを脳裏に描いて、おぞましい記憶を押し込もうとする。

「ふむ、胸板だけでは不満かな」

忍蔵の手が太一郎の背へと回される。

「さすが剣道部だ。

両腕を支える背中の筋肉の見事な厚みだ。

私に愛でられる今日のために、必死に鍛え上げたのだな」

忍蔵がおぞましい妄想を太一郎に囁きかける。

剣道一筋に生きてきた太一郎の人生までを、男に愛玩されるためのものであると上書きしようとする行為に、太一郎は怒りを覚えた。

だが、太一郎はその怒りを顔に出すことはできない。

それは、忍蔵の機嫌を損ねることであり、忍蔵の機嫌を損ねることはこの剣道部を窮地に追いやることであるのだから。

忍蔵の手が太一郎の腕を撫で回す。

「竹刀とチンポ、どっちを握る時間の方が長いのかな」

「竹刀です」

忍蔵のいやらしい問いかけに太一郎は当然の返答をする。

「太一郎くんのチンポは竹刀に嫉妬しているだろうなあ。」

もっともっとシコシコしてくれって金玉が囁いているのが聞こえるよ」

忍蔵の言葉に太一郎は頭に血が上った。

太一郎だって、できるものならばオナニーをしたい。

オナニーをできるようになるのならば大抵のことは犠牲にできる。

けれど、現実の太一郎は快樂へのおぞまじさが原因でオナニーすらできない男の欠陥品なのだ。

そんな太一郎にチンポシコシコだなどと、忍蔵の言葉は悪意に満ちている。

いや、忍蔵は太一郎の事情など知るはずがない。

だからこそ、忍蔵の言葉へのおぞまじさが増していく。

お前の様なデカ玉でオナニーをしないはずがないだろう、と邪推されること自体が、太一郎にとっては苦痛なのだから……

忍蔵の手が太一郎の脇腹を掴む。

「立派な腹筋だな。」

これならばチンポの見事さと合わせて女を善がらせることは容易いだろうなあ。

セックスの経験はあるのかな」

忍蔵が無神経にも太一郎の心の傷に指を突っ込んでくる。

セックスがしたい。

かつては特別な意識もなく望んでいたことではあったが、今の太一郎にとっては悪夢の切っ掛けとなった言葉だ。

セックスがしたい。

この言葉を言質に取られ、太一郎は処女アナルを輪姦され、トコロテン射精までさせられてしまったのだ。

そんな太一郎にとって、セックスの経験という言葉は悪夢を引っ掻き回す悪魔の鉾でしかない。

そもそも、ファーストキスすらしたことがない太一郎がセックスなど経験しているはずがないことは忍蔵にも想像がつくだろう。

それなのに、こんな質問を投げつけてくるなんて、忍蔵は悪魔だ。

「……ありません」

けれど、太一郎は怒りと不満に震える心を押し殺して最低限の返答に留めた。

「童貞なのかい。

君ならば女性に告白されることも多いだろうに」

忍蔵の言葉は太一郎の苦い思い出をどんどん抉り出していく。

確かに、太一郎は女性に告白されたこともある。

けれど、太一郎は女性の思いに応えることができなかった。

自意識過剰なのかもしれない。

けれど、オナニーすらできない太一郎が恋人同士の行為であるセックスができるかどうか不安だったのだ。

セックスに失敗する。

それは太一郎の様な過酷な人生を歩んでいない普通のカップルでも起こりうる微笑ましい失敗だ。

けれど、オナニーすらできない太一郎にとって、セックスの失敗は男としての欠陥が露呈するのではないかという恐怖を誘発させるものであった。

そんな恐怖を抱いていて、どうして女性と交際できるだろうか。

忍蔵は太一郎の苦しみすら踏みにじっていく。

「ああ、それとも」

忍蔵の手が動いた。

「ひい！」

太一郎は尻を掴まれて悲鳴を上げた。

輪姦されたときの記憶が強く思い起こされたのだ。

「おいおい、私たちは男同士じゃないか。

それなのに、生娘のような声を上げて」

忍蔵がにやにやと太一郎を嘲笑う。

「……まさか、生娘なのかな」

忍蔵の言葉は二重の意味で見当外れであった。

男であり、ノンケを自認している太一郎は「娘」などではないし、輪姦された太一郎は既に「生娘」ではなくなっている。

「立派なチンポをぶら下げて童貞とは驚いたものだが」

忍蔵が太一郎のがっしりとした尻肉を遠慮なく揉んでいく。

揉まれるたびに太一郎の脳裏に輪姦されたときの恐怖と感じてしまった己への嫌悪感が蘇っていく。

「まさか、こっちを使っているのかな。

毎晩毎晩、剣道部員たちを侍らせる夜の女王様なのかな」

「違う！」

太一郎は声を荒げた。

忍蔵の機嫌を損ねることは恐ろしかったが、その恐ろしさ以上に、太一郎がアナルセックスを悦んでいるかのような物言いや、大事な仲間である剣道部員たちまで侮辱されたことが許せなかったのだ。

「おいおい、私は紳士だよ。

そのように恫喝しないでくれたまえ」

忍蔵が素早い動作で太一郎から離れる。

怯えているかのような物言いだ、忍蔵の表情は子どもの駄々を受け流す大人の余裕に満ちている。

「まったく、武門の徒ならば弱者を大事にするべきではないのか、な！」

「ぐげえ！」

太一郎は無様な悲鳴を上げて無毛にされた金玉を押さえた。

忍蔵の足が太一郎の金玉を思いっきり蹴り上げたのだ。

脳天まで揺さぶられるかのような痛みに太一郎の頭はくらくらする。

「剣道部を守りたいのならば、頭の後ろに手を組んで大股になりなさい」

忍蔵が穏やかな口調と有無を言わせぬ威圧感を持って太一郎に命令する。

だが、金玉を蹴り上げられるという男にとって最悪の苦痛に太一郎はすぐに動くことはできない。

「あと十秒で用意をしないと剣道部を訴えますよ」

けれど、忍蔵は太一郎への容赦など微塵も感じさせない。

金玉を蹴り上げられて苦しんでいる太一郎への配慮などまったくないのだ。

太一郎は慌てて忍蔵の命令に従う。

両手を頭の後ろに組んで足を大股に開く。

「よくできました、ね！」

ビューン！

「ごぐぎゅえ！」

空気を切る音を立てて忍蔵の足が太一郎の金玉に突き刺さる。

太一郎は無様な悲鳴を上げながら数歩よろめく。

太一郎の目から涙が零れる。

「ひでえ……」

容赦のない金玉蹴り上げに剣道部員の一人が小さく呟く。

「太一郎くん、これは酷いことかな？」

忍蔵が金玉を押さえて前かがみになる太一郎に問いかける。

「私は、この剣道部を救おうとしているのだよ。

その私のすることが剣道部主将である君にとって酷いことならば、私はこの行為を止めるさ。

さあ、答えたまえ。

これは酷いことかな」

忍蔵が穏やかな笑みを浮かべて苦悶の表情を浮かべる太一郎に問いかける。

酷いことに決まっている。

太一郎はそう思った。

金玉は男にとって最大の急所だ。

そんな大事なところを何度も蹴り上げられて感謝をする男など真正のマゾに違いない。

そして、太一郎はマゾではない。

だから、素直に気持ちを述べるのならば「酷いこと」、これに尽きる。

けれど、太一郎には素直に気持ちを述べる権利はない。

もしも、忍蔵の機嫌をこれ以上損ねたら、忍蔵は間違いなくこの剣道部を訴えるだろう。剣道部員である神田と宮本が自転車で追突をしたのだから、忍蔵にはその権利がある。けれど、忍蔵に訴えられたら、歴代の主将から任されたこの剣道部の名誉に傷がつく。剣道部を預かっている太一郎は、己の代で剣道部の名誉に傷をつけることは耐えられなかった。

ならば、太一郎にできる返答はただ一つだ。

「いいえ、酷いことではありません」

「半藤主将！」

太一郎の返答に神田と宮本が悲鳴のような声を上げた。

「俺は大丈夫だ。

だから心配するな」

太一郎は剣道部員たちに、そして己に言い聞かせるように力強く断言した。

「忍蔵さん、続けてください。

どうか、忍蔵さんの気が済むまで続けてください」

太一郎は忍蔵に頭を下げた。

「その言い方、不愉快ですね。

まるで私が男の金玉なんかを蹴りたいようではないですか？」

だが、忍蔵は腕組みをして太一郎を睥睨している。

太一郎の返答が気に入らないと全身で訴えている。

「申し訳ありません、忍蔵さん」

太一郎は剣道部の未来のために忍蔵に頭を下げた。

「金玉を蹴り上げられたいのは太一郎くんであって、私は蹴らなくてもいいのですよ」

忍蔵が言外に「金玉を蹴り上げてください」と言わせようとしていることを太一郎は強く感じた。

そんな屈辱的な言葉を言えるはずがない。

金玉を蹴られて喜ぶ男など真正のマゾ以外にいるはずがない。

けれど、太一郎は主将として剣道部の歴史と名誉を守る義務がある。

……義務が、あるのだ。

太一郎は苦痛に臆する己の心を叱咤した。

そして口を開いた。

「俺の金玉を蹴り上げてください」

そして、両手を頭の後ろに置き、足を大股に開いた。

「仕方ないです、ね！」

忍蔵の足が空気を切った。

「ごべえええ」

太一郎の金玉が玉袋から下腹部に叩き込まれた。

太一郎の太い陰茎が大きく揺れる。

太一郎の目から涙が零れ、鼻水が溢れ出る。

太一郎の金玉が下腹部から玉袋に戻り、たぷんと揺れた。

忍蔵の蹴りの余波で太一郎の太い陰茎と玉袋ががくがくと振動している。

太一郎は鈍痛で頭の中が真っ白になった。

本能的に金玉の無事を確認しようと両手で金玉を包み込む。

「もう満足しましたか？」

忍蔵の言葉は易しかったが、忍蔵の目は加虐の悦びに満ちている。

まだ蹴り足りないという顔をしている。

「いえ、お願い……します……」

太一郎は呼吸を整えてもう一度両手を頭の後ろにおいて大股に足を開いた。

忍蔵の足が空気を切る。

「ぐびいいいい」

太一郎の口から涎が溢れ出た。

太一郎の全身が苦痛に耐えかねてがくがくと震えている。

「そんなに金玉を蹴られて嬉しいのですか、太一郎くん」

忍蔵の言葉にはまだまだ金玉を蹴りたいという圧が感じられる。

「嬉しい……です……」

太一郎は苦痛に怯える己の心を押し殺し、忍蔵に「嬉しい」と口にした。

「その割には顔色が悪いですね。

嘘をついているのではないですか？」

「いいえ！ いいえ！

本当に嬉しいです！」

太一郎はわざとらしい笑みを浮かべるとまた金玉を蹴られるための姿勢を取った。

「金玉を蹴られて嬉しいだなんて、太一郎くんは真正のマゾなのです、ね！」

忍蔵の足が太一郎の金玉を蹴り上げた。

太一郎はあまりの苦痛に膝から崩れ落ちてへたり込んでしまう。

「おやおや、嬉しすぎて立つこともできないのですか？」

変態なのですか？」

「へ、へん……たい……です」

鈍痛で呼吸が乱れる中、太一郎は必死に忍蔵の言葉に同意を示した。

「金玉を蹴られることがそんなに嬉しいのですか？」

正直、気味が悪いですね」

忍蔵は「気味が悪い」と口では言うものの加虐的に歪んだ口は「まだ蹴り足りない」と太一郎に訴えかけている。

太一郎は膝に手を突き、苦痛に苛まれる身体を必死に起こし、金玉を蹴られるために足を大股に開いた。

「お、おねがい……しま……ぎょげえ！」

これまでで一番強い力で金玉を蹴り上げられ、太一郎は脳みそが耳の穴から噴き出すかと思った。

頭の中がぐちゃぐちゃになり、全身の力がどこかに逃げてしまう。

太一郎は前のめりに倒れ込んだ。

腕が先に落ちたため、頭を床にぶつけずに済んだことは不幸中の幸いであった。

そんな太一郎の下腹部の力が急激に緩んだ。

不味い、と思うより早く太一郎の股間から湯気が立ち上がる。
金玉を蹴り上げられる苦痛に膀胱が決壊し、失禁してしまったのだ。
太一郎の股間から湯気を立てながら尿の池が広がっていく。
失禁を止めようと太一郎は慌てて立ち上がろうとするが、一度流れ出た尿を止められるように人間の身体はできてない。
結局、太一郎は全身を震わせながら膀胱の中の尿を出し切ってしまった。
「おやおや、二十二歳にもなってお漏らしですか。
恥ずかしいですね」
忍蔵の言葉に太一郎は屈辱を覚えたが、反論をすればまた地獄に落とされると想像がついたので、溢れ出そうになる感情を必死に飲み込むことしかできなかった。

奥付

『クライム・ソドム 2』より、第一話

初出：2021年6月28日

著者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep